

米国心臓協会高血圧分科会 2014 年年次集会

永田 浩三*

米国心臓協会高血圧分科会 2014 年年次集会 (American Heart Association, High Blood Pressure Research 2014 Scientific Sessions) が平成 26 年 9 月 9 日より 12 日まで、4 日間にわたり米国サンフランシスコにて開催された。前年に続いて、抄録が採択されたため、大学院生 (修士課程 1 年生 長澤君) とともに参加した。米国心臓協会 (AHA) には全部で 16 の分科会があり、毎年 11 月に開催される本会の年次集会の他に、各分科会が単独または合同で開催する年次集会がある。高血圧部会は分科会の 1 つであり、マンモス集会である本会 (参加者約 2 万人) と比べて、規模は小さいが、専門分化して自分たちの研究領域に関する最先端の知見が入手できること、また 9 月開催で夏季休暇と重なるため、参加しやすいことから参加するようになった。他に、疫学と予防 (EPI)、生活習慣と心臓・代謝の健康 (LIFESTYLE) 等の分科会では臨床検査技師や看護師を含む healthcare professional が多く参加しており、機会があれば、ぜひ参加してみたい。皆のおかげで、推薦により 2014 年 4 月に AHA の International Fellow (FAHA) に選出される榮譽を得ることができた。

当研究室では、食塩感受性高血圧とメタボリックシンドロームの動物モデルを用いて、多面的な病態解析と予防・治療法の開発を目標に研究を行っている。今回発表した演題は「メタボリックシンドロームラットにおいてグルココルチコイド受容体遮断薬が寒冷ストレスによって誘導される心筋と脂肪の病態および代謝異常の増悪を改善す

る」ことを明らかにしたもので、彼の修士論文のテーマでもある。会場では、例にもれず、とても見栄えの良いポスターを提示するとともに、座長への説明と質疑においても、どこで覚えたのか、英語力にもすこぶる感心した (写真 1)。本人は緊張まくっていただけだったが、そうは見えず、やはり、若いうちに海外を含む他流試合をたくさん経験することは重要であるとあらためて認識した。また、Trainee Onsite Poster Competition のセッションであったため、とてもよい訓練の場になったと思う。彼の場合、既に高血圧専門誌に英文論文が掲載された卒業研究に続いて、本修士論文も国際専門誌への投稿へ向けて準備完了間近である。今回の集会で特に印象に残ったテーマは、肥満とメタボリックシンドロームの病態解析に関す

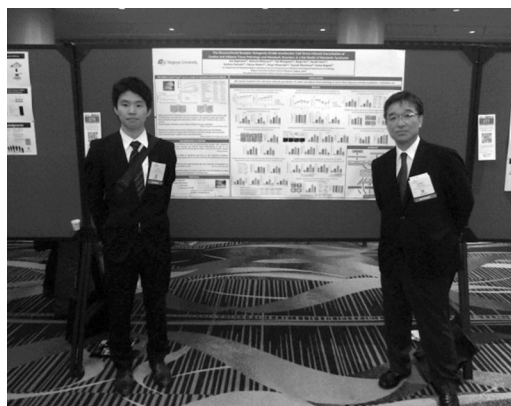


写真 1 ポスターの前にて発表者 (左) と著者 (右)

*名古屋大学大学院医学系研究科医療技術学専攻病態解析学講座 nagata@met.nagoya-u.ac.jp



写真2 Hoover Towerの頂上から眺めたスタンフォード大学のキャンパス

る新しい切り口および高血圧における炎症、免疫、サイトカインの役割に関するセッションで、特に、新しい装置や手法を用いた基礎的な解析方法はやはり米国のほうが一歩先を行っているように感じた。私自身、36歳より2年余りボストンに留学したが、学術的なことのみでなく、視野や人脈の面でもその後の人生にプラスになっており、よい経験をさせてもらった。また、本学はこのたびスーパーグローバル大学創成支援のタイプAに採択されたため、世界レベルの教育研究のさらなる推進とともにグローバル人材の育成に向けた本格的な取り組みが始まっている。今後、部局でも外国人留学生の受け入れとともに、多くの学生が短期留学も含めた海外への留学を経験する機会に恵まれると期待され、日本人の人生観や世界観も変わっていくと思う。

もう一つ、今回の学会旅行の収穫はスタンフォード大学を垣間見ることができたことである。サンフランシスコから電車(Caltrain)で1時間南へ下り、Palo Altoという駅で下りた。シャトルバスにしばらく乗ると、巨大なキャンパスが姿を現した。Hoover Towerの頂上からはキャンパスを一望でき、たいそう風情のあるロマネスク調の建物が立ち並び、地平線の彼方には世界に冠たるシリコンバレーのIT企業の本社があるという説明があった(写真2)。キャンパス内には立派な教会もあり、思わず神妙に手を合わせた。産学連携が成功した代表的な大学であり、機会があればまた訪れ

てみたい exciting な場所であった。

人口の高齢化および人口減少の流れの中で、医療費の削減と健康寿命の延伸のため、医療は治療から予防へ、また入院から在宅へとシフトしており、コメディカルの専門職としての役割は今後確実に増大する。さらに、医療知識や技術の進歩により、疾病予測に基づく医療の可能性が見えてきたことから、コメディカルの健康科学者(healthcare scientist)としての役割が今後大いに期待される。これからの臨床検査技師は高い病態解析能力を身に付けることで検査診断学の立場から病院における医療(特にチーム医療)に主体的に貢献するとともに、大学やヘルスケア関連企業においては疾病予測の立場から新しい検査法や予防および治療法の開発に積極的に参画できるようになると信じる。我々の部局においても、多様なエキスパートの存在の強みを活かして、生活習慣病を含む慢性疾患管理のための予測医療システムの開発を目指して、慢性疾患の発症予防と重症化予防に資する新たな生体指標と革新的な管理方法を開発するための領域融合研究への取り組みが既に始まっている。今後、成果を発信できれば幸いである。

最後に、新たな研究テーマや手法に取り組み、成果を学会や論文で発表するプロセスは決して平坦ではないが、若手教員や学生に勇気づけられながら、目標を達成できた時の喜びはひとしおである。誌面を借りて、皆に感謝したい。